

家庭教育通信

1年生になったら 7

第67号 令和元年7月11日発行

～「まねびとまなび」 あらためて語る遊びの大切さ～

今回は「人がまなぶ」という営みの原点を考えてみましょう。

そもそも「まなび（学ぶ）」の語源は「まねる（真似る）」だと言われます。職人が達人の技を見て真似を繰り返して身につけていくように、こどもたちも大人の言動をまねて、大切なことを学んでいきます。

例えば、敬語。

ある親御さんは、保育園の先生から息子（5歳）のことで、「〇〇君はみんなの前に出てお話しする時に、丁寧ことばが使える子ですね」と褒められたそうです。息子さんは、「おやつを作ってくださいる給食室の〇〇さんが・・・」とお話ししたらしいです。

これはたぶん親がふだん話す言葉をまねしたのでしょう。5歳でも場に合った敬語（丁寧語）が使えるという実例です。幼児から学童期にかけてこどもは爆発的に言葉を覚えます。周りの大人が日常どんな場面でどういう言葉を使っているか、見て聞いて学んでいます。私達大人は次世代に、良い日本語を伝えていきたいものですね。

次は、「雨降りの日に水たまりをじっと見ていた〇〇ちゃん」のエピソードです。

〇〇ちゃん（6歳）は雨の日、水のおもてにきれいな輪が次々に広がっているのに気づきました。何だろう？雨が落ちるとできるのかな。近くにあった小石を水面に落としてみました。できました！輪が静かに広がり、重なり合って消えたりする。不思議だなあ！

このとき夢中で雨のしずくから生まれる波紋で遊んでいた〇〇ちゃんは、中学生になって理科で「音波」を学んだ時に「あっあれと似てる！」と気づき、体験と知識が自分のなかでつながる瞬間の喜びを感じたそうです。小さい時の何気ない遊びのなかに隠れていた科学の芽。水たまりにしゃがんでいた自分を、せき立てずに見守ってくれた親への感謝を〇〇さんは述べていました。

幼いころの遊びのなかには、人や物事に関する真理が含まれていて、私達は知らず知らずそれを体験として学んでいるのでしょう。五感を通した体験（遊び）の重要性がわかりますね。

地域教育課社会教育担当
Tel (3647) 9676